

第648号



喬木村公民館：長野県下伊那郡喬木村6664

発行日 2023年3月16日  
 発行責任者 喬木村公民館長 徹  
 市 瀬  
 編集責任者 公民館編集部 長 志  
 仲 田 久  
 印刷 龍共印刷株式会社



## 第2回平和学習会

### 「ちむぐりさ」

菜の花の沖縄日記を上映して

「ちむぐりさ」沖縄の言葉で誰かの心の痛みを自分の心の痛みとして一緒に痛めること。菜の花さんは本土に生まれ高校生時代を沖縄で過ごしました。彼女が沖縄の暮らしの中で感じたことが、故郷の新聞コラムに「菜の花の沖縄日記」として連載されました。この映画の軸です。

戦後も基地問題に揺れる沖縄。そこで暮らしたことのない私たちが見ている沖縄は、切り取られた報道画面ばかりです。彼女にとって三年間の日常と交流は、沖縄を内側から見る視点と問題に直に触れる機会となりました。その間にも次々に起こる基地関連の事件や事故。足を運び人に会い空気を感ぜようとする。行かなければ見えなかったことへの



気が包まれました。上映後に皆さんに書いて頂いた感想も、言葉に収まり切らないもので溢れていました。「自分は誰なのか。どれが正しいことなのか。沖縄で生活すればするほど揺らいでいった。わかっていたはずのことが、どんどんわからなくなっていた。」中略

私は誰なのか、ようやくわかった。自分が嫌いなものを他人に押し付け続けている一人だった。

沖縄に行くと、沖縄で起きている問題を解決しようとするのは間違っていた。問題の根源は沖縄になかった。日々、自分のいるところに転がっている小さい理不尽に気づき、考え、ぶつかって、悩み、隣に声を広げていかなくても、沖縄で起きていることを止められないと思った。だから、私の中の沖縄はこれからも続く。」

(映画パンフレットより)  
 揺さぶられました。私の中の「沖縄」とは何だ！

この物語は、三吉という少年に育てられた山犬「灰坊太郎」と三吉の深い絆が、狩りの名人とよばれる運平と対立しながらも、最後は連携して、山犬との戦いを乗り切るというお話です。

三吉と、灰坊太郎の絆を、とてもよく感じる場面は、山犬との戦いの時に「足にほうたいをした灰坊太郎は、きずだらけになつて、よたよたと、三吉のところにほうたいをきた。そこで、三吉のひざもとまで来ると、ぼつたりたおれてしまった。」という場面です。三吉が「こら、灰坊太郎！」とそくざに言った言葉が、「灰坊太郎を、絶対に失いたくない。」という、強い意志と深い愛情から生まれた言葉だったからです。私は、この場面を、初めて読んだ時、涙が止まらなかつた。

私は始め、三吉は「少し頑固な性格」だと思っていました。なぜなら、狩りの名人「運平」に、何度も「灰坊太郎をゆずってくれ」と言われているのに、絶対にゆずらなかつたからです。私だったら、一度や二度でなく、何度もしつこく言われたら、わたししてしまうかた。

もう一つ、物語を読み進めて、分かったことは、題名の「アルプスの猛犬」の「猛犬」の部分です。猛犬とは、性質が荒くはげしい犬のことなので、椋鳩十先生が、題名に「猛犬」をつけたことが、最初はとも疑問でした。しかし、「猛犬」とは、「灰坊太郎」のことを指しているのではありません。山犬であった灰坊太郎が、子犬の頃から三吉に育てられて、野生の荒々しさのないふつうの犬のように育ちましたが、「どのりよう犬よりも足が速く、え物の性質をよく知っていた」ので、その全てを、「猛犬」と表現したのだと思います。この「アルプスの猛犬」という物語から学んだことは、三吉のように「強

く、優しく、広い心を持つことが大切」ということです。なぜなら、この物語の最後の「灰坊太郎が死んでしまふかもしれない場面」で、灰坊太郎のことをあれほど憎んで前足をうちぬいてしまった運平が、「灰坊太郎のきずをきず薬をぬりこんでいた」からです。私は、「三吉と灰坊太郎の強い優しさ愛情」が、運平の心を変えたのだと思います。「三吉と灰坊太郎の優しさ」と固い絆は、憎しみ合い対立していた運平の心までも変えてしまうような大きくて深いものだったのだと感じます。だから、三吉のような「広く優しい心」を持つという事は、とても大切なことだと思います。また、この物語で、命の大切さについても、学ばされました。運平の命は、誰一人欠けても守ることができなかつた命なので、三吉のつとさの判断と灰坊太郎の強さが、奇跡を起こした物語なのだと思います。(館長)

「自分は誰なのか。どれが正しいことなのか。沖縄で生活すればするほど揺らいでいった。わかっていたはずのことが、どんどんわからなくなっていた。」中略

私は誰なのか、ようやくわかった。自分が嫌いなものを他人に押し付け続けている一人だった。

沖縄に行くと、沖縄で起きている問題を解決しようとするのは間違っていた。問題の根源は沖縄になかった。日々、自分のいるところに転がっている小さい理不尽に気づき、考え、ぶつかって、悩み、隣に声を広げていかなくても、沖縄で起きていることを止められないと思った。だから、私の中の沖縄はこれからも続く。」

(映画パンフレットより)  
 揺さぶられました。私の中の「沖縄」とは何だ！

**優秀賞**  
 (小学校5・6年の部)

**固い絆が成し遂げたこと**  
 「アルプスの猛犬」  
 喬木村立喬木第一小学校五年生 松島杏佳

理由論社

**NHKのど自慢大会**  
**飯田で開催**  
 村出場者は...

NHK「のど自慢」の公開生放送が飯田文化会でも、物語を読んでいる私よりも、三吉の方がもっと深い悲しみだつたと考えると、その時の三吉の気持ち、想像できないぐらいの絶望感だつたのだと思います。

私は始め、三吉は「少し頑固な性格」だと思っていました。なぜなら、狩りの名人「運平」に、何度も「灰坊太郎をゆずってくれ」と言われているのに、絶対にゆずらなかつたからです。私だったら、一度や二度でなく、何度もしつこく言われたら、わたししてしまうかた。

もう一つ、物語を読み進めて、分かったことは、題名の「アルプスの猛犬」の「猛犬」の部分です。猛犬とは、性質が荒くはげしい犬のことなので、椋鳩十先生が、題名に「猛犬」をつけたことが、最初はとも疑問でした。しかし、「猛犬」とは、「灰坊太郎」のことを指しているのではありません。山犬であった灰坊太郎が、子犬の頃から三吉に育てられて、野生の荒々しさのないふつうの犬のように育ちましたが、「どのりよう犬よりも足が速く、え物の性質をよく知っていた」ので、その全てを、「猛犬」と表現したのだと思います。この「アルプスの猛犬」という物語から学んだことは、三吉のように「強

く、優しく、広い心を持つことが大切」ということです。なぜなら、この物語の最後の「灰坊太郎が死んでしまふかもしれない場面」で、灰坊太郎のことをあれほど憎んで前足をうちぬいてしまった運平が、「灰坊太郎のきずをきず薬をぬりこんでいた」からです。私は、「三吉と灰坊太郎の強い優しさ愛情」が、運平の心を変えたのだと思います。「三吉と灰坊太郎の優しさ」と固い絆は、憎しみ合い対立していた運平の心までも変えてしまうような大きくて深いものだったのだと感じます。だから、三吉のような「広く優しい心」を持つという事は、とても大切なことだと思います。また、この物語で、命の大切さについても、学ばされました。運平の命は、誰一人欠けても守ることができなかつた命なので、三吉のつとさの判断と灰坊太郎の強さが、奇跡を起こした物語なのだと思います。(館長)

三月三日はひな祭り。歴史民俗資料館にも可愛いお雛様が展示されています。関ヶ原の戦いの後、旧領復帰した阿島領主知久則直の母貴寺の宮が手作りした雛人形です。則直の父は神之峰最後の城主知久頼氏であり、貴寺の宮は頼氏の奥方です。資料館にある古文書「貴寺の宮由緒書」によると、後桓原院皇子木寺の宮(貴

寺の宮)母子とも在京で、なくなる子細が出来永正年間、遠江国入野村(現在の浜松市入野)の龍雲寺へ館を構えたとあります。龍雲寺は康仁親王により開基された寺とされており、木寺の宮は康仁親王であるとされます。木寺の宮には男三人、女子二人の子供があり男子の内長男と三男は信玄に仕え戦死、次男は出

家しています。女子は一人が遠江国堀江、大沢右衛門基胤へ、あと二人は信州知久の城主大和守(頼氏)へ嫁したと記されています。

展示の雛人形の添え書きには頼氏の元嫁いた貴寺の宮について次のように書かれています。

「知久家杉崎家御由緒の訳」遠江入野御所法号龍松院殿貴寺の宮 女 初縁 新田家出生 新田友作 再縁 神之峰城主従五位 下知久大和守頼氏 出生 知久万亀(則直の幼名)右の通異父同腹之兄弟の証

に御座候。この文面から則直の母貴寺の宮と頼氏とは再婚であったこと、前夫との間に新田友作がいたことがわかります。新田は杉崎と改名しております。入野の国人であった新田家は家康により滅ばされその奥方であった貴寺の宮は家康の命により頼氏の元嫁になります。

時は経て、頼氏は浜松にて不慮の自害、残された貴寺の宮とその子則直は家康を頼り神之峰城を落ちのびます。やがて家康のもとで成長した則直、一二歳の時に関ヶ原の戦いが起き、出

館で、二十三年ぶりに行われました。申し込みは約五百組、その中から二百十組が選ばれ、前日の予選会で十八組が本線へ進みました。

村関係では、加々須の小澤優子さんが合格。「予選会の通知が届き、出演できました。合格の鐘が鳴り、大ファンの水森かおりさんとも話ができて、TVを見た方には心がほっこりしたと言っていたきました。夢のような一時でした。」と話してくれました。

「優しく、広い心を持つことが大切」ということです。なぜなら、この物語の最後の「灰坊太郎が死んでしまふかもしれない場面」で、灰坊太郎のことをあれほど憎んで前足をうちぬいてしまった運平が、「灰坊太郎のきずをきず薬をぬりこんでいた」からです。私は、「三吉と灰坊太郎の強い優しさ愛情」が、運平の心を変えたのだと思います。「三吉と灰坊太郎の優しさ」と固い絆は、憎しみ合い対立していた運平の心までも変えてしまうような大きくて深いものだったのだと感じます。だから、三吉のような「広く優しい心」を持つという事は、とても大切なことだと思います。また、この物語で、命の大切さについても、学ばされました。運平の命は、誰一人欠けても守ることができなかつた命なので、三吉のつとさの判断と灰坊太郎の強さが、奇跡を起こした物語なのだと思います。(館長)

優秀賞 (中学校の部)



椋鳩十が描いた未来

「ふしぎな石と魚の島」 長野市立櫻ヶ岡中学校三年 岩佐 天花

私が読んだ「ふしぎな石と魚の島」という物語は主人公の村岡三五が姫島という島に住んでいる叔父のところへ訪ねる場面から始まります。そこで三五のいとこの春夫に出会い二人は島を探索していきます。二人が島の歴史を自分たちの手で探っていくところで小さな島の中で一つ一つの出来事や描写が細かく書かれています。私は読んでいて、場面の壮大さに迫力があり、三五と春夫と共に冒険しているような臨場感も持ち合わせていて、とても楽しく読むことができました。

え影響が及び尊い命を失っていることもあり。戦争は「現在」を優先して起るもの。戦争をして人たちは「未来」のことを考えているのか。誰かが気付けているのか。周りから見ている人はそう思います。また、今の地球では「持続可能」と唱えられていますが、しかし今の自分が満足できれば良いと、水の無駄使い、電気の使い過ぎをしている人間はいます。姫島のように誰かが動かないと未来は悪化していくばかりです。

このように私たちもこの島の人びとを見習って自分の子孫が今の私たちのように快適に幸に楽しく過ごせるような未来が必要であると思います。「ふしぎな石と魚の島」が出版された時、椋鳩十さんは、今を生きる私たちやその先の未来を生きる人間に向かってそんなメッセージをこの広い物語の中に託していたのではないのでしょうか。自分の

「にせもの」の正彦。彼が、市瀬先生から渡された『ハイジ』という一冊から本の世界に目覚め、「赤松は夕やけ色の幹をしていた。そういう木の何百本も、すくすくと立ち並んでいる林はお祭りの市場のような、はなやかな感じがした」ととらえるくだりである。思えば「にせもの」英雄のこの章は名文のつるべ打ちだ。「活字の林から、金色の陽の光のようなものが、にじみ出てきたり、何ともいわれぬ、不思議な音色みたいなのが流れ出てくるように、うっとり、活字のつくりだすことばの中にとけこんでいくや、「同じ名前のアルプスの峰々が、ハイジのアルプスと同じように、まっ赤に夕やけて、遠く遠く続いているのだ」という情景描写、そして「感動というものは、人間を感動の色彩にそめ上げ、感動

の方向に心を引っばっていくものだ」に極まる。正彦が心を震わせた経験(つまり感動)が、やはり活字を通じて、時空を超えて僕に宿り、栄村の自然に「ハイジの夕やけ」を重ねさせたのだ。

正彦も、ちょうど市瀬先生と出会ったこの頃は、「にせもの」英雄を卒業し、講談本に熱中していた自分を卒業し、真の感動に身を委ねることの高適性がわかってきた時期だ。その後の「セガテン二伝」に魅かれるのも、中学校で正木先生の薫陶を受けるのも、この時期の「ハイジの夕やけ」の感動がその根底にあったらばこそだ。

僕は、いつの日か栄村の常慶院で秋の夕やけを堪能したい。先ほど「感動は時空を超える」と書いた。視るだけではない。冬の訪れが混ざった北風の音を聞き、西に傾いた赤い陽に照らされたい。そして、わが身も地球の一欠片(ひとかけら)であることを体全体で味わいたい。正彦の故郷と栄村では、長野県の南と北の果て数百キロメートルも離れている。時代も違う。しかし感動は時空を超えることを教えてくれた。

正彦の「ハイジの夕やけ」の感動は、僕に多くのことを教えてくれた。

優秀賞 (一般の部)

感動は時空を超える

「にせもの」英雄 長野市 山口 真一

今年、僕は下水内郡栄村にある常慶院という古寺を訪れる機会があった。山の斜面の地形を利用した作りの境内で、一對の仁王像が門番のように構えている。山門をくぐって西の方角へ向かって急な石段を上がった。やつの思いで石段を上がると、そこかしこに視界が開ける。左手には鐘つき堂、右手から正面には大きな本堂、そして何よりその奥や周囲にかけては緑の山々が覆っている。時期が時期だったので、ここまでも「暑い」という気持ちしか湧かなかった。

「にせもの」の正彦。彼が、市瀬先生から渡された『ハイジ』という一冊から本の世界に目覚め、「赤松は夕やけ色の幹をしていた。そういう木の何百本も、すくすくと立ち並んでいる林はお祭りの市場のような、はなやかな感じがした」ととらえるくだりである。思えば「にせもの」英雄のこの章は名文のつるべ打ちだ。「活字の林から、金色の陽の光のようなものが、にじみ出てきたり、何ともいわれぬ、不思議な音色みたいなのが流れ出てくるように、うっとり、活字のつくりだすことばの中にとけこんでいくや、「同じ名前のアルプスの峰々が、ハイジのアルプスと同じように、まっ赤に夕やけて、遠く遠く続いているのだ」という情景描写、そして「感動というものは、人間を感動の色彩にそめ上げ、感動

の方向に心を引っばっていくものだ」に極まる。正彦が心を震わせた経験(つまり感動)が、やはり活字を通じて、時空を超えて僕に宿り、栄村の自然に「ハイジの夕やけ」を重ねさせたのだ。

正彦も、ちょうど市瀬先生と出会ったこの頃は、「にせもの」英雄を卒業し、講談本に熱中していた自分を卒業し、真の感動に身を委ねることの高適性がわかってきた時期だ。その後の「セガテン二伝」に魅かれるのも、中学校で正木先生の薫陶を受けるのも、この時期の「ハイジの夕やけ」の感動がその根底にあったらばこそだ。

たかぎ短歌会

如月歌会詠草

煙火打ちを楽しみて来し八十路なる夫はようやく退く決意する 木下 寿子

冬枯れの庭にのこれる「高砂百合」風に吹かれて種を撒き 元島 康子

息子等は亡夫の名一字を犬の名に「勝一郎」と呼びて餌をやる 小椋 りよ

生業を引退すれば所在なく言葉に出さねど心が揺らぐ 知久 美子

受験した女孫と一緒にドキドキと結果決まる日 内山 貴子

脳梗塞乗り越えし友以前より浚渌として二度生きている

大寒のつれて来たりし今朝の雪裸木の肌をふんわりつつむ 市瀬 准子

いつまでも友で居ようネと高卒時約した貴女今は特養 すり初めも七草がゆもお座なりに済ませながらも健康願う 田中 妙子

厳寒も家に籠らず散歩とて夫は野道を一人で歩む 和田 京子

御嶽山の行者の禊岩のぞき見てはるか昭和の長閑さ偲ぶ 内山 和子

兵隊さん戦車兵に憧れし幼日ありきレオパルト2 塩澤 静男

福澤 亀人

宇佐美さん 弓道全国大会出場



第四十二回全国高等学校弓道大会(十二月二十三日〜二十五日開催)に女子個人の部で出場された宇佐美瑠菜さん(飯田女子高二年・富田)の激励会が

十二月十九日に行われ、村及び村体育協会から激励金が授与されました。宇佐美さんは、十月二十二〜二十三日に行われた長野県大会女子個人の部で優勝し、熊本県熊本市で行われる全国大会に出場することになりました。結果は初戦にて四射中二中で惜しくも敗退しました。



して長野県で優勝し全国へ出場しました。大会は惜しくも敗退となりましたが、今後のご健闘をお祈りいたします。

編集後記

三月いろいろな別れがいたる所である。年度替わりの時期、別れ又は次の出会いの時でもある。

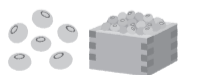
先日まで寒い寒いとストーブから離れられなかったが、最近では昼はぼかぼか。こつちがセンチになろうとおかまもなく、自然は正確で立ち止まる事もなく前へ進んでいく。

これから出会う多くの事に不安もあるけれど、又思いうかがは進むという事。一日一日大切に楽しんで行こうと思ふ春の日です。

【節分ちよとアンケート 結果について】

●節分で投げる豆は何豆? → 煎り大豆 50% 落花生 50%

ご参加ありがとうございました(^o^)



春です サークル活動をしませんか?

公民館には、趣味や教養を高めるためのサークルが数多くあります。新しい学び・交友関係の開拓に向けて、サークル活動に参加してみませんか?

また、新規サークルを立ち上げるには、5人以上のメンバー(村内居住又は勤務者が半分以上が条件)が集まれば登録申請が可能です!

詳しくは公民館事務局(TEL:33-2002)までお問合せください。